

アーサー・コナン・ドイル作
伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izuno

第五章 二組の恋人たち

わたしは詮索好きな人間ではないつもりだが、それから数日過ぎ、さらに数週間が過ぎて、ヘザストーン將軍に関する謎への興味は、ますます強くなる一方だった。

もっと有益なことに注意を向けようと、土地管理の仕事に精を出したりしたが、無駄だった。何をしても、どこにいても、この謎が付きまとって離れない。どうやら満足のいく答えが出ない限り、何にも手につきそうになかった。

人の背丈ほどの塀をめぐらした館の前を通りかかると、わたしは必ずその前で足を止めた。そして、その重々しい錠のついた大きな鉄門を眺めながら、この屋敷に秘められた謎についてひとしきり頭を悩まさずにはいられなかった。しかし、どんなに推理を尽くしても、その真相を解き明かすような答えに行き着くことはできなかった。

ある晩、妹は病気の小作人の見舞いか何かで外出していた。妹は数多くの慈善行為で、村人から慕われていたのだった。

妹は戻ってくるなり、こう言った。「ジョン、クルンバー館を夜見たことある?」

「ないよ」わたしは読みさしの本を置いて言った。「ほら、將軍とマクニールさんが見に来ただろ。あの晩見たつきりだ」

「じゃ、急いで帽子をかぶって、一緒に来て」妹は明らかに興奮し、何かに怯えている様子だった。

「えっ? いったいどうしたんだい? まさか火事じゃないだろうね。ウイグタン中が火の海になったって顔してるよ」

妹はちよつと表情をゆるめた。「火事っていうわけじゃないけど...。お願いだから来て! どうしても見てもらいたいの」

日頃から妹を驚かすようなことは言わないようにしてきたから、わたしが隣人に関心を寄せていることを知るはずがない。わたしはすぐに帽子をかぶると、暗闇の中、妹の後を追った。わたしたちは荒野の小道をたどった。登りきった所に、周囲の樅の木に遮られずにクルンバー館を見下ろせる場所がある。

「ほら、あれ見て！」妹は高台で立ち止まって言った。

建物は光の洪水に包まれていた。一瞬はつとしたが、火事でないのはすぐにわかった。一階は鎧戸が下りていたが、二階の大きな窓から塔のてっぺんの小窓にいたるまで、どこもかしこも煌々たる光を放っている。どの部屋にも無数のランプがともされているらしい。

さらに不思議なことに、まばゆいばかりに照らされた部屋にはまったく人の気配がなく、家具さえ置かれていない部屋もある。広い屋敷中、ひっそりとして何一つ動く物はなく、黄色い光が揺らめきもせず輝いているだけだった。

その光景に呆然としていると、隣で短くすすり泣く声があった。

「エスター、どうした？」わたしは妹の顔をのぞきこんだ。

「怖いよ。ジョン、帰りましょう。怖くてたまらないの！」

妹はわたしの腕にしがみついて、コートの手端をぎゅっと握った。

「大丈夫だよ。なんでもないじゃないか。何がそんなに怖いんだい？」

「あの人たちよ。ヘザストーン家の人たちが怖い。どうして、こんなに明かりをつけてるの？毎晩こうだって聞いたわ。將軍は人を見ると、どうしてウサギみたいにびくするのかしら。何かわけがあるのよ、ジョン。だから怖い」

わたしはしきりに妹をなだめながら、家に連れて帰り、寝る前に熱いニガー酒（ワインに砂糖とレモンを加えたもの）を飲ませた。その後、妹を刺激しないよう、わたしはヘザストーン家のことに触れないように注意を払い、妹の口からもその話が出ることは二度となかった。

今までずっと、妹は隣人のことを観察しては、一人で悩んでいたにちがいない。そうでなければ、いくらたくさん明かりがついているからといっても、それだけであんなに取り乱すはずがない。いままでも、奇妙な出来事がいくつかあって心にひっかかっていたからこそ、ショックを受けたのではないだろうか。

そのときわたしが感じたことは、結局正しかったことが後にわかるのだが、妹にはわたし以上にクルンバー館を薄気味悪く思うだけの理由があったのだ。もともとは好奇心から始まったのだが、思いもしない出来事が次々起こるにつれて、わたしたちはヘザストーン家の運命に密接に関わることになるのである。

その後、モータントはわたしの誘いを受けて家に遊びにくるようになり、ときには美しい妹を伴うこともあった。わたしたちは四人で荒野を散歩したり、晴れていれば小船でアイルランド海に漕ぎ出したりもした。

そういう折、この兄妹は子供のように無邪気にはしゃいだ。あの昔のような家から抜け出して、たとえ一、二時間でも気の合った友達と気晴らしができるのは、どんなにうれしかったことだろう。二組の男女が人目を避けて親しい交際を続ければ、行き着く先は見えている。知人から友人へ、友人から恋へと発展するのは、自然な成り行きだった。

わたしたちの恋の物語はあまりに個人的な内容なので、ここでは触れないでおく。今わたしの傍らにいるガブリエルも、それに賛成してくれている。だから、初めて会ってからたった二週間で、モーダントはエスターの心をとらえ、またガブリエルはわたしに永遠の愛を誓ったと言つにとどめておこう。わたしは恋愛小説を書くつもりもないし、記録する事実の筋道を見失うこともしたくない。事件は、あくまでもヘザストーン将軍に関するものなのだ。

ともかく、わたしたちが婚約してからは、兄妹はますます頻繁にブランクサムを訪れるようになり、将軍が仕事でウイゲタンに出かけたり、持病の通風で部屋に閉じこもっていたりするときは、丸一日一緒に過ごすこともあった。

父はいつでも喜んで二人を迎え、「冗談を飛ばしたり、東洋の詩を引用したりしたものだ。わたしたちから何もかも打ち明けられていた父は、二人を自分の子供のように思っていた。

それでも、将軍がひどく不安を募らせてふさぎ込んでいるときは、ガブリエルもモーダントも何週間も抜け出せなかった。そんなとき、老人は番兵のように気難しい顔をして門のところ立っていたり、屋敷に忍び込む者がいないか警戒しながら、私道を行ったり来たりしたものだ。

夕方、館の前を通りかかると、木陰を歩き回る将軍の陰気な姿が見えたこともあるし、骨ばった浅黒い顔が垣根の間から、疑わしそつにこちらを見ているときもあった。

引きつった顔で不安げに見回している将軍を見るたびに、心が痛まずにはいられなかった。この背を丸めおじけづいている老人が、かつては祖国のために戦い、その勇敢な戦いぶりで勲章まで授けられた将軍だったとは、誰が信じるだろう。

しかし、これほど老人が警戒していたにもかかわらず、それをかいくぐってわたしたちの逢瀬は続いていた。館のすぐ裏の堀に横木が二本ゆるんでいる箇所があり、それを取り外して簡単に抜け穴を作ることができた。しかし、将軍の見回りは気まぐれで、いっどこに現れるかわからないので、ろくに話も交わさず別れなければならなかった。

そういう束の間の逢瀬のうちの一つは、今でも生き生きとよみがえってくる。次々起こる不思議な出来事、そして、わたしたちの人生に影を投げかけることになる恐ろしい結末。その中であって、この記憶だけはひとときわ輝き、心温まる思い出だ。

その日、わたしは館に向かっていた。朝降った雨に草は濡れ、あたりは鋤で掘り返した土の香りがたちこめていた。ガブリエルはもう抜け穴を出て、サンザシの木の下で待っていた。わたしたちは手を取り合い、緩やかな起伏がかなたまで続く荒野と、白い泡を立てながらそれを取り巻いている青い海峡を見下ろした。

北西のかなたには、スロストーン山の頂が日に輝いていた。また、ベルファストへの航路をせわしなく行きかう汽船の煙も見えた。

「まあ、きれい！」ガブリエルはわたしの腕にすがりついて言った。「ああ、ジョン、心配いとなんかほっぽり出して、いっしょにあの船で遠くに行きたいわ」

「ほっほり出したい心配」として何？何か役に立ちたいけど、ほぐに話せない」と、「
「あなたに隠し事なんか無いわ。あなたも知っているとおり、父のことよ。あんまりつ
ばな功績をたてた人が、こそそ田舎から田舎に逃げ回って、塀や錠で自分を守らなき
やならないなんて、あまりに可愛いそつ。こんな心配ごと、あなたにもどつしよつまな
いでしょ？」

「お父様はどうしてそつなつたんだろつ」

「それがわからないの」ガブリエルは率直に言った。「身近に危険が迫つてると思
いこんでいることしか知らないわ。それも父がインドにいたとき、自分で原因を作つた
らしいの。それ以上のことは何にも知らない」

「でも、お兄さんはどうか。あの口ぶりからすると事情を知っているようだよ。そ
れに、本気で信じているみたいだった」

「ええ、そつ。兄も母も知つてるのに、わたしには教えてくれないのよ。父は今、び
りぴりしていて、昼も夜も気が休まることはないの。でも、もつすぐ十月五日よね、そ
れを過ぎれば落ちつくんだけど」

「どつしてわかるの？」わたしは驚いて言った。

「今までもそつだったから。いつも十月五日になると、異常なくらい怯えるんですも
の。数年前から、その日になると兄とわたしを部屋に閉じ込めるようになったから、何
が起こったのかよくわからないの。でも、その日が過ぎると父はひどく安心した様子に
なつて、また十月五日が近づくまでは普通でいられるのよ」

「じゃあ、あと十日くらいだね。そついえば、どつして夜に部屋中明かりをつけてい
るんだい？」

「あら、知つていたの？それも父が怖がるからなの。ちよつとでも暗い所があると嫌
がつて。夜になると屋根裏部屋から地下室までくまなく調べて回るのよ。廊下や使つて
ない部屋にまで大きなランプをいくつも置いてね、夕方になるとすぐに女中に明かりを
つけさせるの」

「女中もよく逃げ出さないもんだなあ」私は笑つて言った。「こころ辺の女の人は迷
信深いから、わけのわからないことがあると怖がると思つただけだね」

「料理人も女中たちもね、ロンドンから連れてきたから慣れつこになつてゐるのよ。
何かと面倒をかける分、お手当てもはずんでゐるし。ここの者は御者のイスレール・ス
テークスだけよ。でも無骨で、そんなことで怯えるような人じゃないわ」

「かわいそつに」わたしは横のほつそりした優しい姿を見やつて言った。「そんな所
にいちやだめだよ。どつしても君を助け出したい。この際將軍のところに行つて、結婚
の申し込みをしてもいいかい？断られてもともとと思えばいい」

すると、ガブリエルはさつと顔色を変えてわたしを見た。

「お願いだから、そんなことしないで！お父様は真夜中だつて、わたしたちをたたき
起こして、すぐにまた片田舎に引つ越してしまつわ。そつなつたらもうあなたに会えな

くなってしまう。それどころか、手紙だつて出せなくなるのよ。そして、わたしたちを二度と家の敷地から出さないでしようね」

「そんなに薄情な方には見えなかったけどなあ。険しい顔をしていても、目は優しくった」

「ええ、本当は優しい人なんだけど、言いつけに背いたりしたら、怖いったらないの。あなたはそんな父を見たことがないでしょうけど、できればお見せしたくないわ。でも、そついう頑固なくらい意志の強いところがあつたからこそ、軍人として成功したのでしょね。インドでは父はみんなに尊敬されていたのよ。部下の兵士たちは怖がつていたけれど、どこまでもついていくほど父を慕っていたわ」

「そのときからびくびくすることはあつたの？」

「たまにはあつたけど、こんなにひどくはなかつた。わたしにはそれがどんなものかはわからないけれど、危険が年々迫っていると父は思っているようなの。ああ、ジョン、こんな風に待っているなんて、頭の上に剣がぶら下がっているみたい。それにそれがどこにぶら下がっているかもわからないから、よけいに怖い」

「ガブリエル」わたしはその手を取って自分の方に引き寄せた。「この素晴らしい田舎の景色や広大な青い海を見てごらん。ほんとになんて平和できれいだろつ。それから、あの灰色の荒野の赤い瓦屋根の家。あの下には信心深い素朴な人々が住んでいるんだ。額に汗して働き、誰に文句を言うわけでもない。七マイルも行けば、大きな町があつて防犯のための新式の道具も備わっている。十マイル先には守備隊の駐屯地があつて、いつでも電報で軍隊を呼ぶことができる。近くにこんなに心強い助けがあるんだから、常識から考えてもこの片田舎に危険が迫っているわけじゃないか。その危険つて、お父さんの健康のことじゃないんだよね」

「ええ。一、二度ストレンラーのイースタリング先生に往診を頼んだことがあるけど、そのときはちよつと体調が悪かつただけ。決してそついう意味の危険じゃないの」

「それなら、大丈夫」と私は笑つて言った。「危険なんてないよ。妄想が幻覚に決まつてる。それ以外には考えられない」

「単に幻覚だつたら、兄の髪が白くなつたり、母があんなに憔悴したりするかしら」「始終お父様がぴりぴりしていれば、神経の細い人ならそつなるさ」

「いいえ、違つわ！」がブリエルは悲しそつに首を横に振つた。「じゃ、どうしてわたしだけそつならないの？わたしだけが、恐ろしい秘密を知らないからよ」

「ねえ、幽霊とかそついった話はもう時代遅れだよ。そんなものを怖がる人なんていやしない。じゃ、その線を除くと、何が残る？何にもないじゃないか。インドの暑さのせいで、お父様はちよつと混乱なさつたんだよ」

ガブリエルは何か答えようとしたが、何か物音を聞きつけたよつにびくつとした。そしておおずとあたりを見回すと、ふいに顔色を変えた。目を大きく見開いて何かに釘づけになっている。

その視線をたどったわたしは、人の顔を見つけてぞつとした。木々の後ろからわたしたちを窺っているその顔は、悪意に満ちた憎悪と怒りでゆがんでいる。見つかったのがわかると、その人物は木陰から姿を現し、こちらに歩いてきた。それは、なんと將軍その人だった。あごひげは怒りで逆立ち、静脈の透けて見えるまぶたの下からは、狂人のような目がぎらぎらしていた。